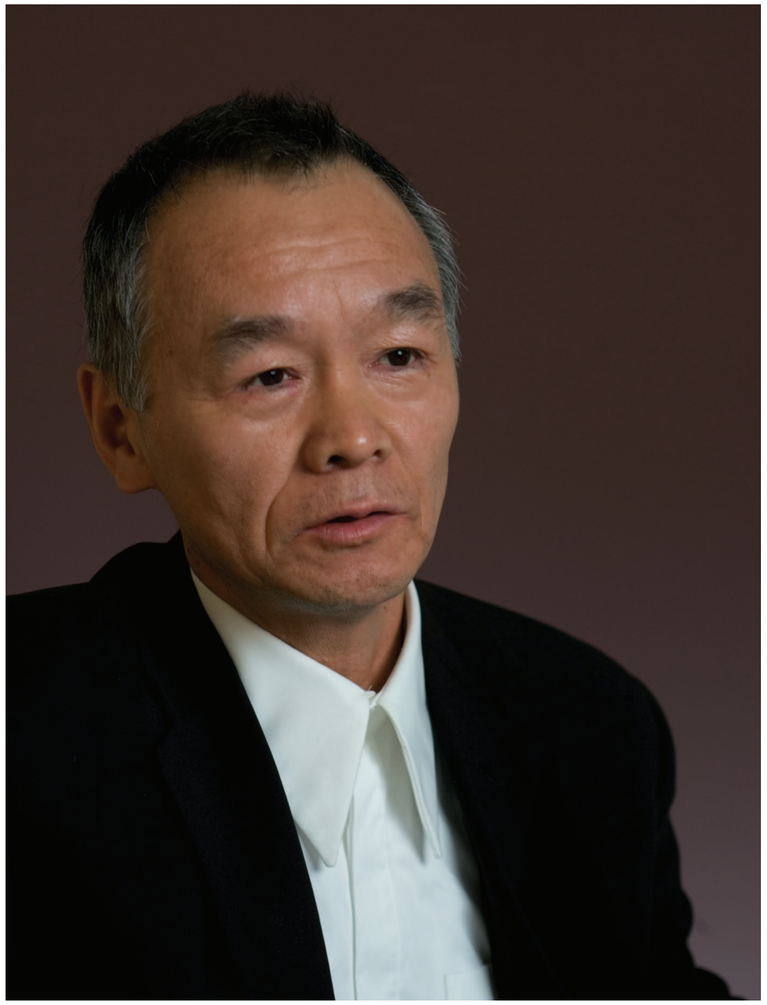


建築は中庸を持って良しとすべきである。
西欧の古典建築の山脈の中に
現代建築への答えが見える。

陶器二三雄

Fumio TOKI

建築を言葉で説明することは出来ない
三角定規でプロポーションを確認する手だれの建築家は
シンプルさの極みを見つめている。

COM vol.19 CONTENTS

COM TALK	川原亜矢子	2
Front Line 建築家インタビュー	陶器二三雄	3
Arrangement 納入事例	ルネッサンスタワー上野池之端	8
	ペガサート	10
	川崎イーストワンビル	12
Renewal リニューアル事例	FROM-1st 南青山SOビル	14
Information	COMプレゼント	16

COM TALK
川原亜矢子

車は大好きです。三台所有していて、目的によって使い分けています。

ロケに行くときは悪路に強いRV。都内を走るときはコンパクトな乗用車。愛犬・ソレイユ（ゴールデンリトリバー）と愛犬・ソレイユとのプライベート旅行を日記風にまとめたものです。

愛犬たちとのドライブでは、必ず一時間走ったら車を止めて休憩をとるようにしています。車から降ろして、外の空気を吸わせたり、車のまわりを走らせたりして、リフレッシュさせます。それと、必ずお手洗いに寄ることを習慣づけています。

ソレイユは大型犬なので、自分の荷物はリュックサックに入れて、自分で背負って出かけます。中には、おしっこシート、トイレットペーパー、水筒、雨用のフードやビニールのドライブはステーションワゴンと。それぞれTPOで使い分けています。都内はコンパクトな車が絶対いいですね。路地を走ったり、駐車するにも場所をとらないから便利です。

「ソレイユ（＋トーモイ）トラベル」という本を出版しました。

シートなどが入っています。

車の良いところは、〝自分ひとりの時間に浸りながら、行きたい場所に着ける〟というところですね。

機械式駐車場はよく利用します。以前は、車の出し入れがゆっくりだったので、不便に思うこともあったのですが、最近は随分早くなって便利ですね。それから、駐車場のマナーは絶対、守って欲しいです。アンテナを収め、サイドミラーを倒し、サイドブレーキを引く。アラーム解除も忘れないようしたいですね。

Ayako KAWAHARA

■プロフィール　女優

『mc シスター』専属モデルとして、デビュー。映画「キッチン」で日本アカデミー賞、ブルーリボン賞受賞ほか高い評価を得る。その後、活躍の舞台を東京から、パリ、ニューヨーク、ミラノへと広げ、世界のトップモデルに。シャネルやイヴ・サンローラン、ケンゾーなど数多くのメゾンのパリコレクションに出演。その後女優として、TVドラマや映画に出演。TVCMでもチャーミングなルックスと独特の雰囲気で人気を集める。

ヴェネツィアで建築を学んだ青春時代

若い頃、〝第一工房〟[*1]で働いていました。自分がこれから建築家として自立するために、なにが必要かを模索していました。

ひとつは、日本の建築ジャーナリズムへの懐疑。もてはやされるスター建築家とその脈絡のない作品群に心が動かなかった。

また、設計するうえで、当時行き詰まってしまったのは、建築をシンプルにシンプルに作ると限りなくゼロに近づいてしまう。自分自身でその先が見えなくなってしまった。

国立のヴェネツィア建築大学を留学先に選んだのは、日本でル・コルビジェなどを通して間接的に古典に触れるのではなく、古典が溢れているイタリアに身を置いて、直接古典を、その奥の装飾を学んでみたかったから。

建築における〝光〟や〝素材〟〝空間のあり方〟・・・。そういうことはその当時の教条的機能主義建築からは何も学べない。建築の本質を肌で感じるためにイタリアに行こう、そう考えた。

〝シンプルさ〟の奥に〝装飾〟があるのか、とすればその〝装飾〟とは。それは大きな課題だった。学究的に古典を崇め、極めるのでなく、オーダーや形態に惑わされないで、現代の建築と同質の建物として見る、そしてそこにある本質を学ぶ。

留学時代に私が学んだヴェネツィアの建築家[*2]サンソビーノ、[*3]パラーデオ、そして[*4]カルロ・スカルパなどの仕事は、強烈な個性を発揮しながらも、都市との調和、光と影、比例、質感、品位など全てに於いて見事な建築であった。

ヘルシンキコンサートホール

時が磨いた〝建築の古典〟への畏敬

私が手がけた建物は極めてシンプルで素材感は豊かである。そして、すみずみまでしっかり作る。端の端まできちんとチェックして、丁寧に。

国立国会図書館関西館でも、六万平方メートルの建物をここまでやるか、という位、細部をきちんと作った。デザインはたいしたデザインでもない。箱で、シンプルで。でも、壁面もきれいなプロポーションになっているので、ものすごく気持ちがいい。

多くの方から賛辞をいただいたが、先日も、カナダのナショナルライブラリーの館長やオーストラリアの専門家が見学に来て、驚いていた。美しさとともに、日本独自の精緻さ、繊細さがある、と。イタリアの〝[*5]ドムス誌〟を始めヨーロッパでの評価の方がむしろ高い。

街に建築物を作るだけで、公共性がある。注意が必要だ。家一軒にしても。やはり、街に対して敬意を払い、気持ちの良い建物を建てたいと思う。表層の、はかない時代性をそのまま反映するのではなく、永続性があり、時間の経過とともに輝きが増す建物をめざしている。

建築は、昔から大きな山脈の中で淘汰されてきた歴史がある。自分だけの恣意的なデザインではなく、絶えず歴史的な建物で検証を得ながら作れば、間違うことはない。

国立国会図書館関西館　閲覧室

＊1　**第一工房**　株式会社第一工房。1960年創立。代表作に「佐賀県立博物館」（1970年）、「マガジンハウス」（1983年）、「群馬県立館林美術館」（2001年）など作品数は200を超える。
＊2　**サンソビーノ**　イタリア後期ルネサンスを代表する、ベネツィア建築家の一人。代表作の「サン・マルコ図書館」（1536～1588年）は、最も評価の高いルネサンス建築。
＊3　**パラーデオ**　1508～1580年。イタリア後期ルネサンスの建築家。代表作「ビラ・カプラ」（1550～1551年）は、18世紀のイギリスとアメリカの建築デザインに大きな影響を与え、パラーデオ主義と呼ばれている。

国立国会図書館関西館を手がけて

私はこれまで第一工房在職時を含め四つの図書館の設計に携わってきた。「都立中央図書館」「前橋市立図書館」「大阪芸大塚本記念館」そして今回の「国立国会図書館関西館」だ。

図書館の基本的な機能や、建物の構成については身体に入っている。いくら大きな図書館でも、小さくても、考え方の基本は変わらない。

私の提案は二つの点が評価されたと思っている。

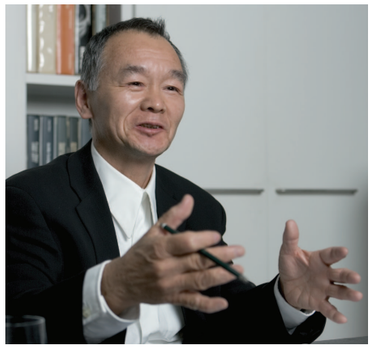
ひとつは、書庫に対する考え方で、固定と集密と自動の三つの書架のうち、固定書架を利便性の高いカウンターの近くに、自動書架をあえて最後部に持ってきた。六百万冊の中での閲覧の頻度と迅速な提供を考えた結果である。使われる本は限られる。本の請求から届くまでの時間の短縮が、大きな図書館の命題である。

もうひとつは大規模建築の設えである。防水や空調の手立てを万全にして、ボリュームの大きな書庫を地下に置き、五千六百万平方メートルもの、サッカー場ぐらいの広さがある閲覧室を半地下にひとつにまとめた。つまり四分の五は地下か半地下として、採光を必要とする居室のみ地上に出した。

大きな閲覧室は隅々まで光が行き亘るように鋸状の全面トップライトとした。そしてあえて南面から動きのある自然な光を取り入れた。

広大な施設なので、第一次避難所としての中庭を設け、建物のどこにいても、中庭の雑木林を視界に捉えることで、自分の位置と避難経路が体感できるように設計した。

エントランスには滝を配し、京都という都市の文脈から、高瀬川や鴨川のような、薄い水の流れで、喧騒から静寂への軽やかな結界をイメージした。



国立国会図書館関西館　外観

＊4　**カルロ・スカルパ**　1906年イタリア、ヴェネツィア生まれ。卓越した審美眼に裏打ちされた建築の修復・改築と展示デザインで不動の評価を得る。代表作に「カノーヴァ美術館の増築・展示構成」など。
＊5　**ドムス誌**　1928年創刊。イタリア建築・デザイン・アート誌。イタリア建築界の巨匠ジオ・ポンティが初代編集長を務めた。

フィンランドの都市計画と景観

フィンランドのコンペで優秀賞をいただいた時の授賞式での話で、非常に感心したことがある。それは、都市計画の考え方だが。

設計者は公共建築も民間の建築も原則コンペで選ばれる決まりである。

ある街区の住居計画を立てる場合に、ひとつの棟の居住者に、老人から若者、所得層にもバラつきをあえて持たせる。それはどういうことかというと、日本では大阪の千里ニュータウンや東京の多摩ニュータウンが、今は老人ばかりが住む団地になってしまっている。日本の民間の住宅は、新しく建てると、同じ所得層や同世代の人が入居する。歳月とともに住民は年老いていく。やがて老人団地と化す。

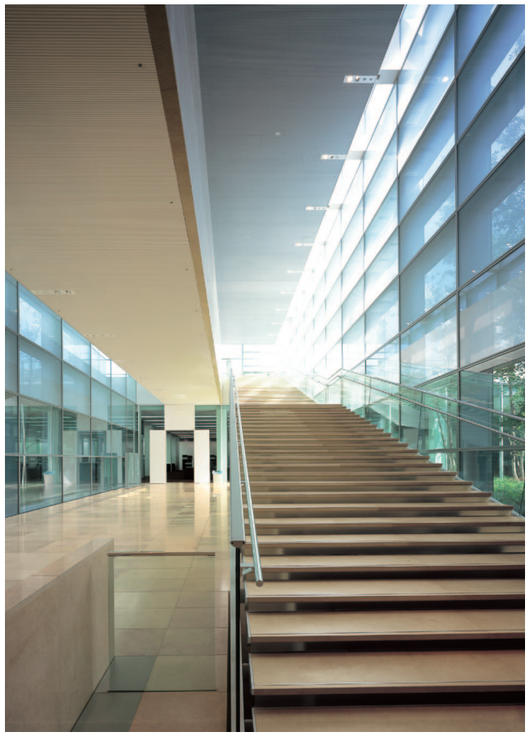
そうすると若い世代だけが住み、子どもたちは老人との接触がない、あるいは、老人ばかりといういびつな街になる。

フィンランドでは都市計画の初めから、街区の中にいろんな層を混ぜようと考える。彼らは建物のデザインだけではなく、何年もかけて中身もよく考えて、ある一角を作る。

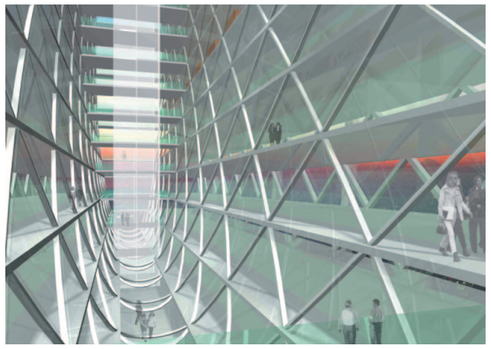
また景観においても極めて厳しい規制が布かれている。外壁の仕上、色、高さ、さらに屋根の勾配のつけ方や、窓のプロポーション、商店の看板の素材や大きさまで細やかな規制がある。ヴェネツィアでは、木製や真鍮製でなければ、看板を出すこともできない。縦長の窓が続いている通りに、突然、横長の窓があると受ける印象が全く変わってしまう。

そのように、都市に建築をつくる場合は細かな規制がある。その規制によって景観のベースをじっくり歳月をかけて作っている。そして市庁舎や図書館であるとかその都市の核になるものを建てるときには、思い切った象徴的なデザインになる。

昔は日本も西洋に追いつけ、追い越せと言っていたが、ここにきて差がむしろ開いている印象を持っている。


国立国会図書館関西館　メイン階段

国立国会図書館関西館　中庭


トリノポルタスーサ（トリノ駅舎コンペ）

景観に寄与する駐車設備とは？

車の収納と、土地の有効利用を考えると、地下駐車場を私は支持したい。地下に置くことでヒートアイランド現象の軽減効果も期待できるし、景観上も問題がない。図書も車も、採光の必要がなければボリュームのあるものは、地下収納が日本では最適だと考える。価値のあるものを安全に収め、最短時間で取り出すシステムという点では、私が国立国会図書館関西館で苦労した機能と、日精の地下駐車設備の特色とは重なるものがある。

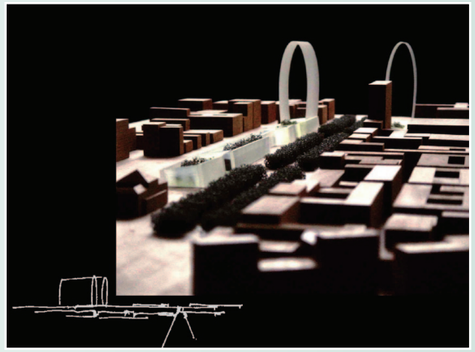
私も住宅に二段式の地上型パーキングを採用しようかと考えるが、鉄骨がむき出しの形状はなんとも、デザインとしては使い辛い。

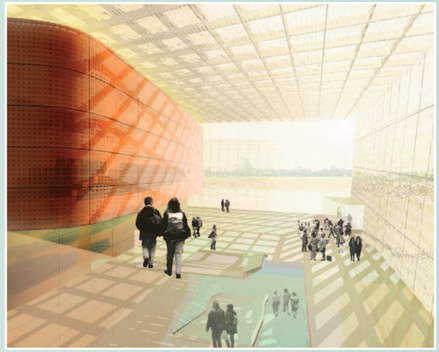
駐車設備のデザインは、屋根の緑化や壁面の処理など、景観的にも改良の余地がまだまだありそうだ。

これまで見てきた駐車場では、ラフェエロ・モネオ*6が設計したスペイン・セビリアの空港の美しさが印象に残る。飛行場と、隣接したパーキングスペースには屋根がかけられ、外部空間から光が入る、たいへんにきれいな設計だった。ラフェエロ・モネオは、バルセロナ駅の駐車場もきれいに作っている。ポイントは車をあらわに露出させないこと。

私も、パーキングでは、最近こんなアイディアを出した。公共建築の駐車場のケースだが、建物の前面に穴を掘って駐車スペースを作り、そこに植栽する。エントランスの通路は駐車場の上を通るブリッジにした。ファサードからは地下から伸びる木しか見えず、ブリッジの下に数十台の駐車した車があるというもの。

自動車を上手く誘導して収めるというデザインには将来的な可能性が考えられる。


トリノポルタスーサ（トリノ駅舎コンペ）


ヘルシンキコンサートホール

P R O F I L E

陶器二三雄（Fumio TOKI）1947年大阪府生まれ　（株）陶器二三雄建築研究所　http://www.ft-a.com/
イタリア国立ヴェネツィア建築大学修復課程終了
第一工房を経て、1988年㈱陶器二三雄建築研究所設立
東京理科大学講師

主な受賞暦
- 日本建築学会賞（2004年）
- 日本建築家協会環境建築賞（2004年）
- 建設業協会賞<BCS賞>（2004年）
- 日本図書館協会建築賞（2004年）
- グットデザイン賞（2004年）
- CFT構造賞（2003年）
- 商環境デザイン賞<JCD賞>（1988年、1992年）

設計競技
- 長春工業大学キャンパス計画設計競技 最優秀賞（2003年）
- ヘルシンキミュージックセンター国際建築設計競技 優秀賞（2000年）
- 国立国会図書館関西館（仮称）国際建築設計競技 最優秀賞(1996年)

＊6　**ラフェエロ・モネオ**　1937年スペイン、トゥデラ生まれ。現代屈指の世界的な建築家。メリダの「古代ローマ博物館」（1985年）で国際的に注目され、1996年にはプリツカー賞とUIA金賞同時受賞の栄誉を受ける。